

「千葉氏を

語る」だより

令和3年度
第13号
発行・編集
千葉氏を語る会事務局
発行日
令和4年2月6日

令和3年11月17日千葉市文化センターにて、日本ペンクラブ会員であります中谷順子氏講師による講習会が開催されました。

「八犬伝」の中の千葉氏 中谷順子

1 享徳の乱と千葉氏の内紛
『南総里見八犬伝』は江戸時代の文豪・曲亭馬琴（滝沢馬琴）が文化十一年（1814年）から書き始め、二十八年間書き継いだベストセラー（読み本）です。八霊玉に導かれる「八犬士」の活躍など奇想天外で、空想小説と考えられがちですが、意外にも関東の史実に沿って進められています。安房里見の祖・里見義実、二代成義（物語では義成）、三代義通を中心に

進行しますが、その時代は千葉氏の内紛時代でもありません。

「結城合戦」（1440年）から始めましょう。鎌倉公方・足利持氏は関東管領筆頭・山内上杉憲実（逆らって「永享の乱」を起こしたため、室町六代将軍・足利義教は討伐の命令を下し、持氏と嫡男・義久は自害に追い込まれ、持氏の遺子春王・安王は、結城氏朝に助けを求めました。室町幕府に不満を持つ関東武士たちは結城に味方して「結城合戦」が起ります。上野国の里見氏もいました。結果は結城側の敗北となり、春王・安王は殺され、里見義実（相模）に逃れ安房に上陸して、安房里見氏の祖となっていく

ます。
行き過ぎた政策を反省した七代将軍義勝は、持氏の幼子・成氏を

しかし成氏は成長すると不満を抱き、享徳三年に上杉憲実の子・憲忠を暗殺し「享徳の乱」（1454年）を起します。上杉の一門は報復にたちあがり返り討ちにあい、山内上杉氏を補佐していた扇谷上杉頼房も討たれ、幕府は討伐に今川氏を向かわせました。

敗れた成氏は下総国古河城に入り、享徳四年に古河公方となります。幕府側は古河公方に対抗して伊豆に堀越公方政知を任命、関東は二十八年間も二つの支配が続きます。

「享徳の乱」と時を同じくして、下総で千葉氏の内紛が起ります。馬加康胤・原胤房に攻められた千葉介胤直は、多古の千田（ちだ）に逃れ、志摩（島）城にたてこもり敗れ、康胤が本家乗っ取り千葉介を名乗る事件に発展しますが、この内紛について、『八犬伝』では直接には書かれていません。しかし『八犬伝』の最終決戦で里見に味方する「普善村（ふせむら）」の村民が出てきます。「普善村」は多古町の「島」地域をモデルにしたもの。胤直の悲運を背景にしているのです。

八代将軍・義政の命により、美濃

篠脇城主下野守・東常縁（千葉介常胤の後裔）が、千葉実胤・自胤を支援し、馬加康胤・原盤房と争い転戦。関東は戦乱へと巻き込まれます。

扇谷上杉家の当主となる扇谷定正の家来が、太田道灌です。道灌は物語では「巨田持資」の名で登場。扇谷勢は五十子（いかづ）陣を中心に反撃に転じ、道灌は家宰として活躍し、防御拠点として河越城、岩槻城を整備。武蔵国豊嶋郡（品川港）に江戸城を築き、定正の命により領主となりました。

道灌の活躍により秩父江戸氏など多くの関東武士が滅びます。山内上杉家の家宰である長尾景春の反乱がおこり、豊島氏が長尾に味方したため、道灌は防御のために千葉氏の内紛を利用して千葉実胤・自胤を支援し、古河公方に味方していた馬加康胤の孫・千葉孝胤を本佐倉の臼井城に追い払います。豊島氏は勢力をなくしていきます。「八犬士」の犬塚信乃（孝の玉）は豊島氏の出、大山道節（忠の玉）は豊島氏の親戚・練馬氏の出。ともに道灌に痛めつけられた豊島氏の子弟たちです。

自胤は道灌の支援のもと千葉介となり、上杉側なので、「八大土」の敵と描かれています。

道灌の主君が扇谷定正ですから、「八大土」の戦う最大の敵は扇谷定正です。

千葉孝胤はその後、古河公方を支援し、一時古河城から追われた成氏をかくまい、里見氏も協力して成氏は古河城に戻ります。

2 千葉氏の出・大坂毛野の登場

道灌の築いた江戸城は、『八大伝』で石浜城の名で書かれています。石浜城の対牛楼で、

「八大土」の犬坂毛野胤智（いぬざかけのたねとも・智の玉）が女田楽師・旦那開野（あさけの）として登場。《対牛楼の戦い》を繰り広げる事はご存知でしょう。《対牛楼の戦い》は

《芳流閣の戦い》と並んで手に汗握る見せ場です。芳流閣とは古河公方の居城のこと。

道灌は主君・扇谷定正のために戦った忠臣ですが、1482年に古河公方と室町幕府との和睦が成立すると蟄居を命ぜられます。「八大土」が活躍するのは道灌が蟄居

させられた時代であり、物語で【巨田持資＝道灌】は蟄居させられながらも、主君・定正を救うため息子の助友を差し向けて「八大土」と戦わせます。「八大伝」は「巨田持資」と「八大土」の戦いでもあります。

馬琴は、忠臣・道灌を尊敬して、「八大土」の戦う最終決戦を道灌の亡き後の日付に設定しているのです。

「八大土」というと里見氏の子息だちと思われがちですが、里見氏と関係ない人物もいます。犬塚信乃、大山道節は豊島氏の出であることはお話しました。犬飼現八（信の玉）は農民の子で、古河公方の臣の犬飼に育てられます。犬村大角（礼の玉）は下野国の郷土で上野国犬村の郷土の養子。大坂毛野（智の玉）は千葉介の家来・栗飯原氏の出。犬川莊助（義の玉）は伊豆の堀越公方莊官の子、安房里見氏家来の蜷崎の親戚。犬田小文吾（悌の玉）は安房里見氏の家来・那古七郎の甥。大江親兵衛（仁の玉）は小文吾の妹の子。

小文吾、親兵衛は安房里見氏との関係が濃厚ですが、莊助や、里見氏の本拠地の上野国と関係する大角、成長し上毛（こうづけ）胤智

と名のる毛野も、いくらか里見氏と関係すると考えると五人でしようか。「八大土」とは鎌倉公方と関東管領上杉氏との闘いで悲運にみまわれた関東武士たちの子弟なのです。

毛野胤智は『八大伝』で、栗飯原胤度の忘形見と描かれ、父は馬加常武の策略で籠山逸東太に惨殺された人物。栗飯原（あいら）氏は小見川一帯を支配し千葉氏と深い関係があります。物語では栗飯原は千葉介胤直の家老と設定され、馬加は馬加康胤を意識しており、籠山は扇谷定正の家来の設定です。毛野は対牛楼で父の仇・馬加や扇谷定正の家来と戦います。馬加が殺されずに逃れるのは馬加が上杉側ではないからでしょう。

「八大土」のなかに、毛野（智の玉）が加わっていることは、注目すべきです。毛野は《対牛楼の戦い》で欄干を飛ぶなど身軽な人物。毛野には源義経の特徴が色濃く加味されています。義経は欄干を飛んで弁慶と争い、八島の戦いでは八艘飛びを披露しました。また義経は諸国流浪して平泉に行き、常に装束を変えて戦った人物として知られ、

神出鬼没ぶりが伝わっています。

毛野もまた女田楽師に姿を変え、乞食になって扇谷定正を狙うなど、どこから現れるとも予想もつかない動きをします。義経は天下を狙うよりも父の仇討ちに熱中する人物で、毛野もまた父の仇討ちに固執する男です。さらに義経は奇襲作戦が得意な智将で、鶴越えの逆落としては有名ですが、『八大伝』の水陸からの最終決戦で、毛野に軍師として大活躍させていて、馬琴が千葉氏を高評価していた事が感じられます。尚、「八大土」が最終決戦で里見義通を大将に戦う市川国府台の場面ですが、国府台城は馬加康胤討伐に向かった太田道灌が築いたといわれ、文明十年（1478年）に道灌が千葉孝胤の臼井城を攻めるのに用いた城で、馬琴はこの事も念頭においていたと思われる。

（注）最終決戦とは、安房里見二代義成・三代義通を大将と仰ぐ「八大土」が、山内・扇谷上杉氏、長尾氏、千葉介自胤、古河成氏、上杉側に加わる武田氏など室町幕府連合軍と戦う水陸からの最終決戦。

千葉氏の祖先について

会員 高野利太郎

第一、千葉氏の祖は高望王

中世において千葉県の方豪族を考へるとき、下総、上総、安房の国において活躍した武將は先ず平良文の子孫である千葉氏の一族である。その父親が高望王（のちの平高望）である。桓武天皇の曾孫として誕生した高望王は承和六年（八三九）九月七日に誕生した（千葉大系図）。宇多天皇の御代寛平二年（八九〇）に平朝臣を賜与され民籍降下（皇族がその身分を離れ臣民になる）し、平高望となった。同年十二月十三日民部卿宗章の反乱を鎮めその功績により、昌泰元年（八九八）上総介（当時上総守は親

王任国で国司などは皇族が任命されるが、任地へは赴任せず地元豪族が介として代行したに任命されて東国に向かう。この時六〇才であった。任地上総国へは、長男国香、次男良兼、三男良将の息子三名を伴って任地に向かった。

高望は任期が過ぎても帰京すること無く、それどころか国香は

前常陸大掾源護の娘を娶り、良将は下総国相馬郡の犬養春枝の娘を妻として迎え、こうして高望は在地の豪族と関係を深めている。

やがて高望は下総、上総、常陸国の未墾地を積極的に開墾し、所領を拡大して勢力を広めたのである。そして自から築き上げた權益を守るため武士団を形成した。それが高望流桓武平氏である。

その後高望は東国出向後五年過ぎた延喜二年（九〇二）に西海道の国司に任命され、太宰府に移った。延喜十一年（九十二）に同地で没したという。享年七十四才であった。しかし没年に関しては延喜十七年という説もある。

第二、千葉氏の祖は平良文か

源平闘将録によると「平高望には十二人の子有り。嫡男国香常陸の大掾、将門が為に誅せらる。次男良望鎮守府の將軍、これ将門の父なり。三男良兼上総介、将門と度々合戦を企て、遂に討たれ了ぬ。四男以下は子無くして、子孫を継がず。第十二の末子良文村岡の五郎、将門が為には伯父為りといえども、養子と成り、其の芸威伝

ふ。将門は八箇国を従へ、弥凶悪の心を構へ、神慮にも憚らず、帝威にも恐れず、擅に仏物を侵し、飽くまで王財を奪ひしが故に、妙見大菩薩、将門が家を出て、良文が許へ渡りたまふ。此に因つて良文、鎌倉の村岡に居住す。五箇国を領じて、子孫繁昌す。」

（福田豊彦・服部幸造氏

全注釈本による）

① 良文の生い立ち

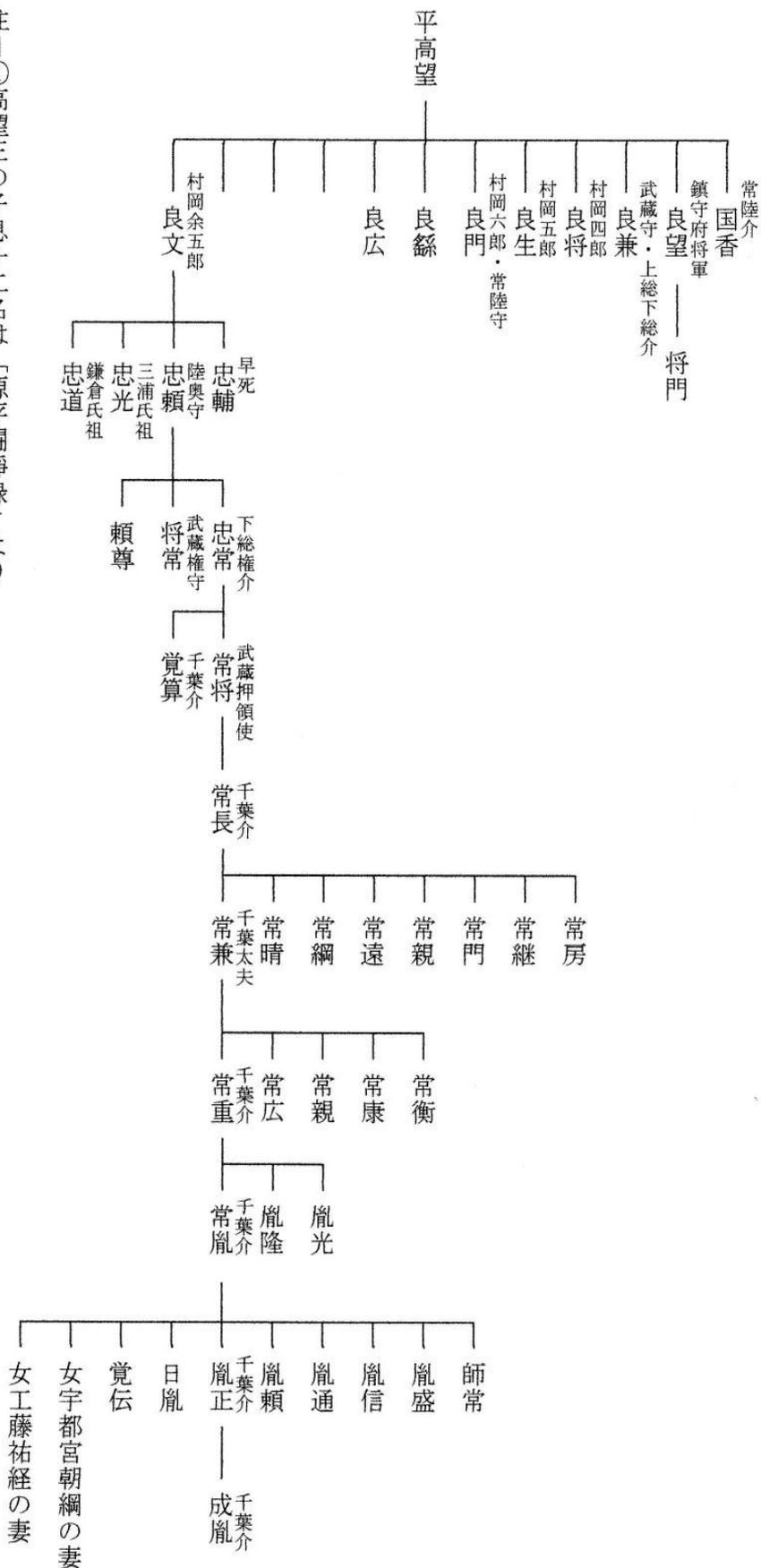
平良文は仁和二年（八八六）三月十八日父高望王、母藤原範世の娘の子として京都に生まれる。前述のように父はその四年後民籍降下して居るから彼はその時五才であった。そして父は昌泰元年（八九八）上総に赴任している。良文は十三才で幼少のためか、側室の子である為か京都に残り育てられた。兄達は既に成人して居る。延元元年（九二二）三六才の時醍醐天皇から「相模国の盜賊を討伐せよ」との勅命を受けて東国に下向し、それを滅ぼしたと伝えられている。良文の向かった先は東国の何処であらう。

② 説話伝承その一

良文は武蔵国大里郡村岡郷（熊谷市村岡）又は相模国高座郡村岡郷（藤沢市村岡）ともされているが、『今昔物語集』には良文と度々争いをしてきた箕田宛（源宛）は武蔵国足立郡箕田郷（鴻巣市箕田）を本拠地して居るから武蔵国かも知れない。「昔東国に源宛・平良文という二人の武士がおり、この二人の領地は荒川を隔てて近い所にあつた。その家来達は度々小競り合いをしてきた。やがて家来同士では無く、二人で一騎打ちをしようと言ふことになり、お互いに家来を引き連れて河原に乗り込み、二人は前に進み出た。始めに源宛は平良文の放つた矢を軽くかわし、次々と射られる矢を刀で打ち落とす。平良文も負けじと源宛が放つ矢を次々と刀で打ち落とし、二人の素晴らしい技に敵味方双方から喝采が送られた。二人は一步も譲らず打ち合いが終わると互いに駆け寄って健闘を称え合い、今後は助け合つて地方の開発に尽力することを誓い合った」

（五頁に続く）

千葉氏関係系図 (徳島本千葉系図より)



注① 高望王の子息十二名は「源平闘諍録」より

② 子息国香・良望・良兼・良将・末子良文は「源平闘諍録」より

③ 他の子息は「徳嶋本千葉系図」より・他の三名は名前不明

④ 忠常の次男覚算と常胤の子息覚伝は「千字集」より

⑤ 常胤の子息日胤は「吾妻鏡」より
(注五件は高野作成)

③ 説話伝承その二

染谷川の戦

承元元年(九三一)平将門・良文は平国香(良文の兄、将門の伯父)と上野国府近くの花蘭村(群馬県高崎市群馬町)の染谷川で戦になり、川は荒れて増水し、将門軍は敗北し、僅か7騎の数で染谷川沿いまで逃げたところ小童(羊妙見菩薩)が現れ、川の浅瀬を求めて渡河させた。更に国香勢の弓矢による攻撃にも小童は敵の弓矢を拾い良文側に与えて射させ七日七夜に及ぶ闘いに敵の大軍に剣の雨を降らしめ、国香の大軍は叶わずして、蜘蛛の子を散らすが如く退散した。小童は天に参らんとした時、良文・将門はいかなる神であるかと尋ねる。小童は「我こそは妙見大菩薩」であるという。

④ 説話伝承その三

蚕飼河の合戦

「源平闘諍録」によると承平五年(九三五)八月上旬の頃相馬の小次郎将門、上総介良兼と伯父甥不快間、常陸国において合戦を企つる程に、良兼は多勢なり、将門は無勢なり、常陸国より蚕飼河の畔に

迫り着けられて、将門河を渡さんと欲るに、橋無く船無くして、思い勞ひける処に、俄に小童出て来たりて、『瀬を渡さん』と告ぐ。

将門此を聞きて蚕飼河を打ち渡し、豊田郡へ打ち越え、河を隔てて闘ふ程に、将門矢種尽きける時は、彼の童、落ちたる矢を拾い取りて将門に与へ、之を射けり。亦将門疲れに及ぶ時は童、将門の弓を捕つて十の矢を矯げて敵を射るに、一つも空箭無かりけり。此を見て

良兼、『只事にも非ず。天の御計らひなり』と思ひながら、彼の所を引き退く『前出』

⑤ 良文その後の活躍

その後良文は天慶二年(九三九)四月十七日陸奥守であり、鎮守府將軍に任じられて、出羽国の俘囚と秋田城主が衝突して乱に發展。これを鎮圧した。そして翌年関東に帰国した。ちやうど同年平将門が反乱をおこし、東国は混乱していたその翌年将門は下野押領使藤原秀郷と国香の子息平貞盛等によつて鎮圧された。この頃良文は下総国橘莊一带を支配して阿玉郡に館を構え、大友城(現東庄町小南)を築

き、海上郡へも進出して居る。その他彼は夕顔の花を良く好み、

子息忠頼に「自分に合いたくなつたら、畑に植えた夕顔の実を開けよ」と告げた。その実の中から観音像が出た。天曆六年(九五二)六七才で死去。現在も香取市阿玉台の白樺山樹林寺にある良文の墓は「夕顔観音塚」と呼ばれている。樹林寺の檀家では現在でも夕顔(干瓢)を食しないという。

第三、平忠常

忠常は父平経明(忠頼)と母左京大夫藤原教宗の娘の子として、天延三年(九七五)九月十三日に生れる。祖父良文以来下総国相馬郡の所領を受け継ぎ、下総國に本拠地として下総国、上総国、安房国県内全域にわたつて勢力を張つていた。武蔵国の押領使にも為つたという。「今昔物語」には

「下総国三平忠恒(忠常)ト言ウ

兵有ケリ、私ノ勢力極メテ大キニシテ、上総下総を皆我マニ進退シテ公事ヲモ事ニモ不為リケリ、マタ常陸守ノ仰スル事ニモ事ニ触レテ忽諸ニシケリ」と伝えられ、下総、上総

を自由に支配し、常陸守の命令をも疎かにしたと言うのである。

此の頃忠常は東庄大友城を拠点とし、この地方で算出される「塩」「砂鉄」等の資源と生産技術の獲得で活躍するのである。すると必然的に国司(受領主)、他の豪族と相争うことになり、此には水運による船の移動、馬による陸路の運搬等に優れた豪族が地元の中富豪族に頼りにされるのである。国司の実力行使に対して猛者(納税者)の反発は激しく忠常の勢力を頼りに反乱まで拡大した。

受領側は朝廷に対して追討使の覇権を申立る。

長和元年(一〇二二)香取の海(霞ヶ浦と利根川の地域)を挟んで、恐らく先の権益(塩、鉄の争い)や私領を巡つて、地元の常陸介源頼信や常陸国の「左右衛門大夫平惟基」と対立し戦う、忠常は頼信の作戦に共鳴して彼の家人となる。しかし平惟基に対しては「先祖の敵」とする。こうして資力、軍事力を強化していく。

長元元年(一〇二七)六月に彼は安房国府を襲撃して、安房守平惟忠を焼殺する事件を起こした。更

に上総国衙を襲撃した。地元の豪族は忠常に反応して、房総二国の反乱に発展する。朝廷は報告を受けて平直方と中原成道を追討使に任命するが失敗し、源頼信を追討使に任命したら呆気なく降伏して逮捕された。そして長元四年六月四日京都に護送される途中美濃国で病死した。この乱のため房総三国は大変な荒廃地となり忠常の子常将、その子常長は懲罰は無しで、地元の復興と再開発に尽力して大変な成果を挙げたのである。

忠常の乱の後康平五年(一〇六二)九月、陸奥国北上川上流の奥六郡(胆沢・和賀・江刺・稗貫・紫波・岩手)の阿倍氏は、租庸を拒むなどして領主の反抗した。同地域は大混乱になった。朝廷では源頼信の子頼義を陸奥守として派遣し、この乱の鎮圧に努めた。この時先の忠常の子である常将が参加して良く闘い軍功を挙げる。(前九年の役)続いて寛治元年(一〇八七)には頼義に味方した清原氏が旧阿倍氏の所領の他に出羽山北三郡を併せ反乱した。これに対して朝廷は源義家を派遣して鎮圧に当たらせ

た。この時も常将の子常長が義家

に参加して活躍する。忠常の乱後こうして千葉氏は東国源氏との関係を強化して常胤の時代頼朝に協力して、鎌倉幕府の設立に尽力するのである。

余談になるが、この時の話「義家が衣川に周辺において阿倍貞任と激戦を繰り返していた。この戦の最中、両武将は和歌を交換した」そうだ。義家が先に下句として『衣の袖は綻びにけり』と読んで敵将に送ると、阿倍貞任はすかさず『年を経し糸の乱れの苦しさに』と返したと伝えられている。この話は後の誰かの創作かも知れないが良く出て来ていると思う。

妙見大菩薩



紙芝居講演会行なわれる

(若葉区小倉台中央自治会)

本会として、外部に出て初めて

「千葉常胤物語」の紙芝居による講演会を行なった。一年程前向後会長が小学生用にと別の組織で紙芝居を作成したものを本会に紹介した。その後本会の事業として取り上げて実施しようと検討を続けた。先ず紙芝居の「読み手」の養成からはじめ二・三回練習会を実施した。次に三年四月二十日定例の勉強会の中で江波戸監事が読み手となり会員向けに実施した。

そして令和三年春千葉市若葉区小倉台中央自治会から文化部の行事として紙芝居を取り上げたいという要請があり、十一月十八日(土)に自治会館会議室において行ないました。参加人員は三十四名、読み手は本会事務局長日向安昭が担当して大変好評を得ました。「良かった」「難しかった」との声もあり、今後とも改善しながら公民館等を通じて「千葉常胤物語」の紙芝居講演会を続けて行きます。

紙芝居講演会の模様



編集後記 編集子

大変遅くなりましたが、会報誌十三号をお届けします。今回号では、中谷順子氏の記事を集めました。それと(会員)高野氏の投稿文を掲載しました。高野氏は一太郎で作成した記事を、何日もかけて不慣れなワードに打ち直してくさいました。ありがとうございます。今後とも会員皆様の御協力をお願い致します。